特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会

災害復興委員会
2025年度 活動報告書

【特集】

情報共有の仕組みと質を整える
～令和７年やつしろ災害支援団体連携会議より ―― 2

南相馬市：平時からの連携会議で他機関の強みと特性を把握 ―― 4
～被災時における災害ボランティアセンター設置・運営のために

話し合いの力、そなえていますか?
～災害復興支援 実践者養成講座を開催 ―― 5

Topics

国内外の災害対策事例から防災において想像し語り合うことの重要性を確認 ―― 6
～「Volunteer's Summit 2026」参加の FAJ 会員から

阪神・淡路大震災の経験を未来へ ―― 6
～神戸防災技術者の会 (K-TEC) 定例会での情報交換

現場に学ぶ防災・復興とつながりの力 ―― 7
～災害復興トークカフェを開催

身近な災害にファシリテーターとしてできることを考える ―― 7
～災害復興委員会オンライン勉強会

災害時の連携を促すファシリテーション (体験型ワークショップ) ―― 7
～ FAJ 中国支部定例会

2025年度活動一覧 ―― 8

特定非営利活動法人
日本ファシリテーション協会
Facilitators Association of Japan

Feature

［特集］

情報共有の仕組みと質を整える

～令和７年やつしろ災害支援団体連携会議より

令和７年８月の九州地方を中心とした大雨災害では、熊本県・鹿児島県等で広範な浸水被害が発生しました。災害復興委員会では、熊本県八代市において「やつしろ災害支援団体連携会議」の支援を行いました。

令和７年８月大雨災害では、熊本県八代市においても広範な浸水被害が発生しました。今回の災害では、短時間に集中的な雨が長時間続いたことによる内水氾濫が主な要因となり、床上・床下浸水を含む多くの住家被害が発生したため、八代市社会福祉協議会では災害ボランティアセンターを設置し、被災者からのニーズ受付、現地調査、ボランティアとのマッチングなどを通じた復旧支援を行ってきました。

発災直後から、県内外の技術系支援団体や災害支援NPO、ボランティアが被災地に入り、多様な主体による支援活動が展開されましたが、支援主体が多様であるがゆえに、活動状況やニーズ、役割分担などの情報が十分に共有されにくい状況も生まれていました。こうした背景から、八代市では行政、社会福祉協議会、技術系支援団体などが集まり、情報共有と役割調整を目的とした「やつしろ災害支援団体連携会議」を開催することになりました。

日本ファシリテーション協会災害復興委員会（FAJ）は、当初この会議には関与していませんでしたが、初期の会議に参加していた技術系支援団体「災害NGO結」から相談を受けたことをきっかけに、その後、八代市社会福祉協議会からの要請を受け、第３回目の連携会議から話し合いの支援に入ることとなりました。

支援にあたっては、まず事前に社会福祉協議会から会

《令和７年８月大雨災害》

令和７年８月6日から11日にかけて、前線が九州付近に停滞し、前線に向かって大陸からの西風と太平洋高気圧周辺からの南西風が合流し、温かく湿った空気が流れ込み大気の状態が非常に不安定となった。熊本県では記録的な大雨となり、110ミリ以上の大雨を観測すると発表される「記録的短時間大雨情報」が15回も発表された。

被害状況（令和８年６月９日時点、熊本県防災推進課発表）

・人的被害　死亡６名（直接死４名、関連死２名）、行方不明１名、重傷者３名、軽傷者22名
・住家被害　全壊28棟、半壊2,696棟、一部破損5,870棟、床上浸水10棟、床下浸水62棟、合計8,666棟

場づくりの重要性を実感

八代市社会福祉協議会　山北 翔大

令和7年8月の大雨災害では、八代市社会福祉協議会において災害ボランティアセンターを立ち上げ、被災された方々からのニーズに向き合いながら、ボランティアの受け入れや活動のコーディネートを行いました。私自身は地域福祉係の職員として、普段はボランティアコーディネーターを担当していますが、災害時の現場は想像以上に変化が激しく、目の前の対応に追われる毎日でした。

今回の災害では、社協だけでは対応しきれない福祉的・技術的なニーズも多く、行政や技術系支援団体・NPOなど、多くの方々と連携しながら進めていく必要がありました。そのため、情報共有と役割調整の場として「やつしろ災害支援団体連携会議」を開催しました。しかし、初期の会議では発言が次々と重なり、議論が整理できないまま時間だけが過ぎていく状況が続きました。

私も会議の進行を担っていましたが、当時は入職3年目、25歳という立場で、経験豊富な支援団体の方々や行政関係者を前にして、発言を止めてはいけない一方で、会議を前に進めなければならない。その間で頭の中が混乱し、どう整理すればよいのか分からなくなる場面も多くありました。正直に言えば、職員の間でも「連携会議恐怖症」と言えるような空気が生まれていたと思います。

そうした中で、日本ファシリテーション協会の支援を受けることになり、会議の進め方が大きく変わりました。目的が明確に共有され、それぞれの立場から意見が引き出され、議論が自然と整理されていきました。それまでとは、全く違う場の空気が生まれ、気が付けば会議が時間通りに終わり、必要な合意が形成されていく様子を目の当たりにし、ファシリテーションの重要性を強く実感しました。

今回の経験を通して、災害時には多くの人が被災地を思って集まりますが、その思いをつなぎ、力を合わせていくための場づくりが非常に重要であると感じました。今後も平時から顔の見える関係を大切にしながら、いざという時に被災者のために力を合わせられる地域づくりにつなげていきたいと思います。

議の状況や参加団体の関係性、これまでの議論の経緯について聞き取りを行い、会議の目的や到達目標を整理しました。そのうえで、会議冒頭で「三者連携による被災地の一日も早い復旧・復興」という共通目的を参加者全体で確認するとともに、議論の方向性を共有しました。また、会議の進め方や発言のルールを明示し、行政、社協、支援団体それぞれの立場から意見が出るように進行を設計しました。

さらに、会議の場では参加者の関係性や発言の偏り、場のエネルギーのバランスなどを観察しながら進行を調整しました。特に、市長が参加する回では場のパワーバランスが大きく変化する可能性があるため、各団体が公平に発言できるよう配慮した導入を行いました。

こうした支援の結果、連携会議では各主体の役割や活動状況が整理され、社会福祉協議会で対応するニーズと技術系支援団体へつなぐニーズの区分も明確になり、さらに、災害ボランティアセンターの活動から、その後の地域支え合いセンターによる生活支援体制への移行も円滑に進めることができたと考えています。

行政・社協・支援団体が一堂に会し、被災者支援のための情報共有と連携を進めた

今回の八代市での支援を通じて、災害対応において多様な主体が集まる場では、情報共有の仕組みだけでなく「対話の質」を整えることが極めて重要であることを改めて実感しています。行政、社会福祉協議会、支援団体など、それぞれが強い思いや専門性を持つからこそ、議論は複雑になり、そうした状況において、第三者的な立場から場を整え、共通の目的に立ち返りながら対話を進めていくファシリテーションの役割はとても大きいと感じています。今後も災害復興委員会として、各地の現場でこうした支援を積み重ねていきます。（FAJ災害復興委員会、平山猛）

南相馬市：平時からの連携会議で他機関の強みと特性を把握
～被災時における災害ボランティアセンター設置・運営のために～

南相馬市では、災害時のボランティアセンターの設置運営にむけて、協定団体と共に連携会議を年4回開催しています。出席するのは南相馬市社協と「災害時における協力に関する協定」を締結する団体や市役所の関係課等です。FAJ災害復興委員会では、毎回ファシリテーターと板書を担当し、会議参加者の皆さんの連携がより進むように支援をしています。県内・全国を見ても先進的なこの取り組みですが、今回は年度の最終回（第4回目）に実施した年間ふりかえりを中心に報告します。（災害復興委員会、遠藤智栄）

南相馬市災害ボランティアセンター連携会議

● 出席者

南相馬市社会福祉協議会 / 南相馬市役所危機管理課 / 南相馬市役所社会福祉班 / カリタス南相馬 / 原町青年会議所（JC）/ オペレーション・ブレッシング・ジャパン（OBJ）

● 4 回の流れ

1 回目　5/7 人事異動に伴い、参加者の自己紹介。目的、目標の確認、今後取り組みたいことのアイデア出し。年間計画の検討。

2 回目　8/14　今年度の取り組みや研修の確認。災害ボランティアセンター設置運営訓練の検討。今年優先したい改善点の確認。カムチャツカ沖地震（7/30）の際の対応を共有。

3 回目　11/14　災害ボランティアセンター設置運営訓練の振り返り。

4 回目　2/9　南相馬市災害ボランティアセンター連携会議の年間ふりかえり。

（写真左）連携会議の様子

〈主なふりかえり〉

良かった点	・所属と顔を知り、関係性が深められ、災害時の他団体の動きを知ることができた。 ・ボラセン立ち上げ訓練が昨年よりよくすることができ、市民の参加もよかった。 ・研修と連携会議を一緒に考え準備段階から関わることができた。
気になった点	・連携会議の内容を自分の組織にもっと浸透・定着させたかった。 ・立ち上げ訓練の実施会場や内容で課題がいくつも見つかった。 ・ふりかえりで出た意見をどう活かし取り組むのか考えていく必要がある。
改善点、取り組みアイデア	・市民防災士や地域の方に訓練のことをもっと知ってもらい、さらに参画につなげたい。 ・発災時の災害ボラセンや関係団体や町内会の動きを、把握したり共有していきたい。 ・連携会議で出た意見をより反映させて実行していきたい。

依頼団体の声

社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会
佐々木 智洋

FAJさんにはフラットな立場で連携会議の進行や板書をご支援いただきました。当事者では生じがちな団体間の上下関係を防ぎ、参加者の意見を中立に繋いでいただいた点が最大の魅力です。毎回工夫された場づくりは大変勉強になり、特にグループワーク形式でのふりかえりは「わかりやすく皆と話せてよかった」と好評で、悩みの種だった団体間の心理的ハードルも下がり感謝しております。　年度替わりの異動で関係構築を再度始めるという課題はありますが、今後も各団体の垣根を下げ、災害時にスムーズに協力し合える「横のつながり」を育むご支援を期待しています。

参加団体の声

一般社団法人カリタス南相馬
根本 摩利

連携会議では、和やかな雰囲気づくりと的確な進行をご支援いただき感謝しております。毎回のチェックインのおかげで新任の方もすぐに場に溶け込め、要点をまとめた板書はふりかえりに大変役立っています。皆の意見を引き出しつつ、必ず時間内に会議をまとめる進行スキルには本当に助けられています。　平時からの繋がりが地震発生時の迅速な情報共有に活きたように、本会議は大きな強みを持っています。災害時など皆が余裕を失う緊急時こそ、全体を見渡せるファシリテーターの存在が不可欠だと感じており、今後も変わらぬご支援を期待しています。

話し合いの力、そなえていますか？
～災害復興支援 実践者養成講座を開催

■開催趣旨■
多様な主体の相互理解と連携を目指して

2/21（土）、3/7（土）の2回に分けてオンラインで実践者養成講座を開催しました。講座には2日間でNPO職員、行政職員、社会福祉協議会の職員等19名の方に参加いただきました。災害の現場では、情報の共有、課題の解決、支援の調整、新たな支援策の創造など様々な場面で話し合いが行われ、多様な主体が連携しながら被災者を支援することが求められます。現場では、お互いのことを知らない初対面の方も多く、また、所属する団体の背景も異なることから、話し合いは容易ではありません。被災者を支援するという方向性は同じであっても、その方法や思いのズレから話しが噛み合わず、連携が上手くいかないこともあります。

そこで重要になるのが、話し合いの舵取りです。一人ひとりの思いや考えを引き出し、相互理解を促すことで、対立から協調へと力のベクトルを向けることが大切な要素になります。話し合いの力は災害時にいきなり発揮できるものではなく、平時から備えておき、いざという時に活用できるという自信を身につけていただきたいという思いから本講座を開催しました。

■開催概要■
4つのスキルで参加者のベクトルを合わせる

講座は、講義、事例提供、実践演習の内容で進めました。講義では話し合いのプロセスの舵取り方法を中心に、ファシリテーションの4つの基本的なスキルを学んでいただき、事例提供では令和7年8月豪雨災害における話し合いの事例をもとに、参加者の力のベクトル合わせや目線合わせの重要性を共有し、実践演習では災害現場の話し合いにおける目的や目標の設定の仕方、課題解決の手順について学んでいただきました。質問時間では、現在も能登半島地震災害の支援に携わっている方からの現場の悩みや質問が出されたことで、より学びを深めることができたのではないかと思います。

■企画担当者から■

多様な背景の方々にご参加いただき、災害とファシリテーションの両側面からコンテンツとプロセスが扱われた場であったと感じています。それぞれの立場や前提の違い、ランクの違いや湧き上がる感情やなど、講義と実践で考え感じることができたとともに、平時でのコミュニケーションの大切さが伝わった講座であったと考えます。

当講座はブラッシュアップを図ると共に、引き続き開催していきたいと思います。

オンラインでの講座の様子

■参加者の声■

- フォロワーシップが重要と感じました。ファシリテーターに頼り切りになってしまいがちであり、ファシリテーションの４つのスキルを知ること、身に付けることが大切と思いました。
- 参加者のパワーの使い方の方向性やバランスを整えることが重要と思いました。また、改めて目的と目標の大切さを感じました。
- もし自分がファシリテーターとして場に立ったと想定したら、自分の意見を言いたくなり、誤った情報を話す可能性があることに気づきました。
- グループワークで他団体の方と話すことで、情報交換ができてよかったです。平時からの繋がりが大切だと感じました。

（FAJ災害復興委員会、杉村郁雄、山根弘和）

講座で使用した資料の一部

国内外の災害対策事例から防災において想像し語り合うことの重要性を確認
～「Volunteer's Summit 2026」参加のFAJ会員から

FAJ災害復興委員会では2026年2月23日に開催された「Volunteer's Summit 2026」（主催：日本財団ボランティアセンター）の分科会「ドイツに学ぶ！日本の災害対策 次なる一手」においてモデレーターを担当、本記事では分科会に参加したFAJ会員の吉武恵美子さんから感想を寄せていただきました。

ドイツの事例として紹介された、連邦技術支援隊（THW）は、８万人以上のボランティアが、国の制度下で専門訓練を受け活動に参加。仕事との両立を支える社会基盤があり、多世代が活動できる仕組みがデザインされていることが印象的でした。

国内事例として紹介された香川大学危機管理先端教育研究センターでは、学生による防災士資格取得の推進や、災害を自分事として具体的に捉えるための工夫として、断水想定の自衛隊風呂入浴体験など、次世代の担い手育成やフェイズを跨いで活動する実践的な教育プログラムが、非常に印象的でした。

今回の参加を通して、ファシリテーターとして、防災は訓練だけでなく「想像し語り合うこと」から始まると再確認しました。日頃、地域団体の方々からは、担い手の高齢化や、持続可能な地域活動のあり方に悩んでいる話を伺うことが多いです。多世代が防災について関わるきっかけをデザインすることや、誰もが不安や問いを安心して共有できる「対話の場」を地域に作ることが、備えを強化する鍵になると実感しました。（FAJ会員、吉武恵美子）

THW（ドイツ連邦技術支援隊）と香川大学の実践事例をもとに、日本の災害対策の未来を考えた分科会の様子

阪神・淡路大震災の経験を未来へ
～神戸防災技術者の会（K-TEC）定例会での情報交換

2025年10月14日にK-TEC第251回定例会に伺い、災害復興委員会の活動紹介と情報交換を行いました。

K-TECは、阪神・淡路大震災をきっかけに発足しました。一番被害が大きかった神戸市では、市民・企業者・行政の「協働」の理念のもと、全国・全世界の皆様方の支援を得ながら、懸命に復旧・復興に取り組んできました。そのまさに最前線で復旧・復興の仕事に携わってきた神戸市職員と退職者の有志が中心となり、当時の経験や教訓を広く伝え、次世代につないでいくため、2004年に設立された団体です。会の活動の主なものとしては①阪神・淡路大震災の経験の伝承活動、②災害発生地域の支援（最近では能登半島地震など）、③定例会（毎月開催）での学習、④図書の発刊となっており、近年では①のうち、「神戸で学ぶ防災学習」の実施がたいへん多くなっており、全国の小・中・高等学校・大学の修学旅行生の受け入れを行っています。

今回は上記③の活動として、話題提供者として山田が参加しました。

災害復興委員会のリーフレットを使い、FAJと委員会の概要を説明した後、報告書を元に、近年の活動を中心に紹介し、その後、質疑応答などで終了しました。

災害に関する多くの知識・経験を有するK-TECと災害復興委員会がコラボして何らかの活動がはじまることを期待させる今回の機会となりました。（FAJ災害復興委員会、山田真司）

現場に学ぶ防災・復興とつながりの力　～災害復興トークカフェを開催

防災や災害復興について最前線で活動している方（FAJ会員）にざっくばらんにオンラインでお話を聴いて交流するトークカフェ。2025年12月は、神戸クロスロード研究会 理事の西修さんをゲストに迎え、阪神・淡路大震災から30年の歩みや、対話型防災教育の実践についてお話しいただきました。震災当時の現場のリアルについて共有いただく中で、その経験を踏まえ、記憶を呼び起こし学び直す機会を持ち続けることの重要性を改めて認識しました。2026年2月は、長野県生活協同組合連合会（長野県生協連）事務局長の中谷隆秀さんより、地域における多様な主体の連携づくりや、災害時に活きる関係性の重要性について共有いただきました。また、中谷さんはコーディネートやファシリテーションを通じて人をつなぐことを実践されており、連携を進める上では、互いに責任を果たし合う関係を築くことが大切だとお話しされていました。いずれの回も、参加者同士の対話を通じて、「話し合う力」とつながりの価値を再認識する機会となりました。（FAJ災害復興委員会、瀬川加織）

トークカフェでの西修さん（左）と、中谷隆秀さん（右）

身近な災害にファシリテーターとしてできることを考える ～災害復興委員会オンライン勉強会

2026年2月18日、災害復興委員会はFAJ会員を対象に「ファシリテーション わたしたちにできること」と題したオンライン勉強会を開催しました。本会は、会員が身近な災害時にファシリテーションスキルを活かして自律的に行動できることを目指しています。

前半は広島での水害後に開催された「地域でこれからの課題を考える会」や、九州北部豪雨での「情報共有会議」の事例が紹介されました。被災地での対話においては、住民の感情に真摯に向き合う姿勢や、行政・ボランティア間の連携を促すための目的の明確化が重要であり、外部の人が入ることで対話が促進される効果も共有されました。

後半は、参加者が「自分にできる備え」を話し合いました。具体策として、近隣住民との関係づくり、防災士の資格取得、平時の会議での「見える化」の実践、NPOや社会福祉協議会とのネットワーク構築などが挙げられました。

また見える化の有効性とAIには困難な「書かない配慮」、心理的安全性やジェンダーバランスへの配慮の重要性など、可視化についての気づきも寄せられました。今後も「知ること、知り合うことも備え」を合言葉に、平時からの繋がりとスキル向上を推進します。（FAJ災害復興委員会、浦山絵里）

「自分の備え」について考え、シェアした参加者

災害時の連携を促すファシリテーション（体験型ワークショップ）～ FAJ中国支部定例会

2026年2月28日（土）中国支部3月定例会にて、災害復興委員会のメンバー3名が話題提供者となり「災害時の連携を促すファシリテーション～○○町での災害時の話し合いに参加してみよう～」を開催しました。

近年は気候変動などの影響もあり、地震や津波といった災害だけでなく大型台風や豪雨といった災害も各地で頻発しており、誰しもがいつ被災者になってもおかしくない状況にいます。災害時に地域の中で「話し合う力」を持つことの意味や、災害が発生した際、私たち一人ひとりが出来ることを考える場を目的としています。

「協働」や「三者間連携」、「中間支援組織」などの言葉の定義や、災害時の行政・社協・NPO等団体の役割と対応範囲の理解など、災害時における基本的な知識を共有しました。その上で、役割（ロール）を演じることにより立場や目的の違い、話される言葉の定義や内容の違いから生じる整理の難しさを経験し、平時からの関係性作りや改めてファシリテーションの重要性を学び合う場であったと感じています。

（FAJ災害復興委員会、山根弘和）

役割の声を聞き、整理を進めている場面

2025年度 活動一覧

※活動会員数41人、受益者（会員）40人、受益者（一般）312人、総計393人（いずれも延べ人数）

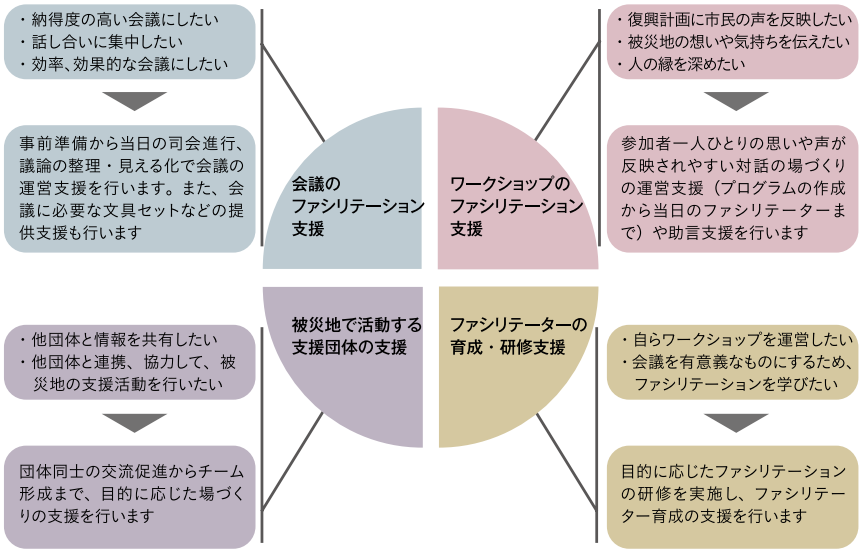
4月18日　石川県社協生活支援相談員向けWS（石川県金沢市）
5月7日　南相馬市災害ボランティアセンター連携会議（福島県南相馬市）
8月14日　南相馬市災害ボランティアセンター連携会議（福島県南相馬市）
10月14日　K-TEC定例会講演（兵庫県神戸市）
10月31日　八代市災害支援団体連携会議（熊本県八代市）
11月11日　JVOADフォーラム参加（東京都千代田区）
11月14日　南相馬市災害ボランティアセンター連携会議（福島県南相馬市）
11月28日　八代市災害支援団体連携会議（熊本県八代市）
12月26日　災害復興トークカフェ（オンライン）
2月3日　災害復興トークカフェ（オンライン）
2月19日　南相馬市災害ボランティアセンター連携会議（福島県南相馬市）
2月21日　実践者養成講座第1回（オンライン）
2月23日　日本財団Volunteer's Summit 2026（東京都文京区）
2月27日　災害復興委員会活動報告会（オンライン）
2月28日　中国支部定例会話題提供（広島県広島市）
3月7日　実践者養成講座第2回（オンライン）

日本ファシリテーション協会と災害復興委員会

ファシリテーション（Facilitation）――、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で参加と相互作用を促す進行役などがわかりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会（FAJ：Facilitators Association of Japan）は、ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し2003年に法人として設立、2004年には内閣府より特定非営利活動法人（NPO）の認証をうけました。2025年7月現在、1,010名の会員が活躍する団体となっています。

災害復興委員会は、2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害直後にFAJ内に設置され、以後、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を柱に各地で活動しています。



特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会
災害復興委員会　2025年度 活動報告書
2025年6月27日発行
編集　特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会　災害復興委員会
浅羽雄介、浦山絵里、小栗由香、杉村郁雄、瀬川加織、野口和裕、疋田恵子、平山猛、元持幸子、山田真司、山根弘和
発行　特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会　東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号　www.faj.or.jp
お問い合せ（Eメール）　fukkou311@faj.or.jp

本書記載の記事・写真・図版等を無断で商用印刷物等に転用することを禁じます。